

(提案11)

日本学術会議主催学術フォーラム「地殻災害の軽減と学術・教育」

- 1 開催日時：平成25年11月16日(土)10時00分～17時00分
- 2 開催場所：日本学術会議講堂
- 3 企画趣旨

東日本大震災の後、地震学・火山学を中心とした自然科学分野と実学としての人文社会科学の相互連携の必要が明瞭となっている。人文社会科学の側からいえば、歴史地震・噴火の史料や発掘痕跡の分析などの災害要因にかかわる文理融合研究、地球科学の発展と地震列島における防災教育・地学教育の在り方の再検討、地殻災害の予知・警告や危機管理に関わる情報論、減災と経済計画・国土計画の在り方についての抜本的な検討など、さまざまな課題が明らかになっている。

自然科学の側からは、まれにしか発生しない大規模地震や火山噴火に関する不確かな情報をどのように社会に伝えるかが問われている。これらの課題は実際には緊密に結びついた問題領域をなしており、フォーラム「地殻災害の軽減と学術・教育」を提案するのは、そのためである。ここで、「地殻災害」とは地震、火山噴火、津波など地殻の活動に誘因される自然災害のことを指す。この間、人文社会科学をこえて問題を検討してきた人々が一堂に会し、地球科学の側の研究の状況、学際領域における文理融合的な研究への要求を直接に聞き、今後の地震・火山噴火をめぐる文理の融合と連携をどのように実現するかを議論したい。

現在、地殻災害をめぐる、学術の鼎の軽重が問われている状態にあるといつてよいなかで、どのような研究計画と学術体制が必要になっているかについて前進的な提案をすることを目的とする。なお、文部科学省科学技術・学術審議会（以下「科学技術審議会」）の測地学分科会「地震火山部会 次期研究計画検討委員会」において、2014年よりの5ヶ年の地震・火山噴火予知に関する観測・研究計画を検討中であり、秋にはまとめられる予定である。科学技術審議会の建議によれば、この計画も防災研究との連携や文理融合的研究を強調するものになるはずであり、その趣旨をふまえて学界における討議を行いたいと考える。

- 4 次第（予定、交渉中のものも含む。）
 - 開会挨拶・趣旨説明
 - 報告（昼休憩を挟む）

佐竹 健治 (地震学、日本学術会議連携会員、東京大学地震研究所教授)

「歴史地震・津波の研究と大地震の長期予測」

中田 節也 (火山学、日本学術会議連携会員、東京大学地震研究所教授、)

「低頻度大規模噴火に備えた研究のあり方」

熊木 洋太 (地理学、日本学術会議連携会員、専修大学文学部教授)

「地殻災害軽減にむけた地理学の役割」

伊藤 谷生 (地質学、帝京平成大学教授)

平川 新 (歴史学・文献、東北大学災害国際科学研究所長)

「地震・津波に関する歴史研究と災害科学研究のあり方」

田中 広明 (歴史学・考古、埼玉県埋蔵文化財調査事業団主査)

林 春男 (防災行動学、日本学術会議連携会員、京都大学防災研究所
巨大災害研究センター教授)

宮城 豊彦 (地理学・防災教育、東北学院大学地域構想学科教授)

パネルディスカッション

(コーディネーター)

平田 直 (日本学術会議連携会員、東京大学地震研究所教授)

木村 茂光 (日本学術会議第一部会員、帝京大学文学部教授)

閉会挨拶

(提案 1 2)

日本学術会議主催学術フォーラム「東日本大震災からの水産業および関連沿岸社会・自然環境の復興・再生に向けて」

1. 共 催：水産・海洋科学研究連絡協議会、日本水産学会
後 援：水産庁（予定）、日本農学アカデミー、大日本水産会（予定）、水産海洋学会、日本付着生物学会、日本魚病学会、国際漁業学会、日本ベントス学会、日本魚類学会、地域漁業学会、日仏海洋学会、日本海洋学会、日本水産増殖学会、マリンバイオテクノロジー学会、日本水産工学会、日本プランクトン学会、漁業経済学会、日本藻類学会

2. 日 時：平成 25 年 11 月 29 日(金) 10:00-17:20

3. 場 所：日本学術会議講堂

4. 開催趣旨

平成 23 年 3 月 11 日に東北太平洋沖で発生した大地震は巨大津波の襲来をもたらし、沿岸地域の漁業および水産関連の職業に携わっていた住民の生活を一瞬のうちに破壊し、地域社会を崩壊させてしまった。さらに、巨大津波の直撃を受けて漏洩した東京電力福島第一原子力発電所の放射能は、海洋汚染をもたらした。漁業および水産関連産業に深刻な影響を未だ与えている。水産学、海洋学関連の学会では大震災発生直後から、このような事態に対して概ね学会ごとの個別の対応を行ってきたが、大震災が沿岸社会に与えた影響は複雑で、その復興・再生にあたっては、様々な視点や角度からの総合的な取組が必要であることがわかってきた。このような背景の下、水産学、海洋学関連の 16 学会は新たに水産・海洋科学研究連絡協議会を立ち上げ、活動を開始した。本シンポジウムでは、この協議会の設立を機に、東日本大震災からの水産業および関連沿岸社会・自然環境の復興・再生に向けてどのような方法があるのか、今まで各学会が取り組んできた事例を紹介しながら議論する。

5. 次 第：

10:00-10:05 開会挨拶

渡部 終五（日本学術会議第二部会員、北里大学海洋生命科学部教授）

10:05-10:15 水産・海洋科学研究連絡協議会について

竹内 俊郎（日本学術会議連携会員、東京海洋大学海洋科学系教授）

10:15-10:35 第 21 期提言「東日本大震災からの新時代の水産業の復興へ」
の見直しについて

八木 信行（日本学術会議特任連携会員、東京大学農学生命科学研究科教授）

報告（第1グループ）

座長：大竹 臣哉（福井県立大学海洋生物資源学部教授、日本水産工学会会長）
10：35－11：00 黒倉 壽（東京大学大学院農学生命科学研究科教授、日本水産学会会員）

「震災後の沿岸漁業の現状と日本水産学会の対応」

11：00－11：25 後藤 友明（岩手県水産技術センター上席専門研究員、水産海洋学会会員）

「東日本大震災に関する水産海洋学会の取組と今後の課題」

11：25－11：50 尾定 誠（東北大学大学院農学研究科教授、日本水産増殖学会会員）

「東北沿岸の水産増養殖の復興に向けた取り組みとこれから」

11：50－12：15 神田 穰太（東京海洋大学大学院海洋科学系教授、日本海洋学会会員）

「福島第一原子力発電所事故に伴う沿岸環境汚染」

12：15－13：15 休憩（昼食）

報告（第2グループ）

座長：田中次郎（東京海洋大学大学院海洋科学系教授、日本藻類学会会長）

13：15－13：40 加戸 隆介（北里大海洋生命科学部教授、日本付着生物学会会員）

「東日本大震災が潮間帯生物の多様性に与えた影響とその評価」

13：40－14：05 大越 健嗣（東邦大学理学部教授、日本ベントス学会会員）

「数100年おきに繰り返す大津波と地盤沈下・干潟の生物はどうなったのか？」

14：05－14：30 小松 輝久（東京大学大気海洋研究所教授、日仏海洋学会会員）

「日仏海洋学会・仏日海洋学会による震災からのカキ養殖復興に向けた取り組み」

14：30－14：55 良永 知義（東京大学大学院農学生命科学研究科教授、日本魚病学会会員）

「貝類養殖の復興のための疾病侵入防止の取り組みと今後へ向けた提言」

14：55－15：10 休憩

報告（第3グループ）

座長：末永 芳美（東京海洋大学大学院海洋科学系教授、漁業経済学会会員）

15：10－15：35 林 紀代美（金沢大学人間社会研究域人間科学系准教授、地域漁業学会会員）

「『減災』からみつめる漁業地域 ―今後の災害に備えるために―」

15：35－16：00 有路 昌彦（近畿大学農学部教授、国際漁業学会会員）

「水産流通加工業が被災地の漁業復興に果たす役割」

16：00－16：25 松浦 啓一（日本学術会議特任連携会員、日本魚類学会会員）

「魚類標本のレスキュー活動から得た教訓と自然史標本の管理・活用の改善を目指して」

16：25－16：30 休憩

16：30－17：15 パネルディスカッション

司会 青木 一郎（日本学術会議連携会員、東京大学名誉教授）

17：15－17：20 閉会挨拶

帰山 雅秀（日本学術会議連携会員、北海道大学国際本部特任教授）

6. コーディネーター

渡部 終五（北里大学海洋生命科学部教授、日本学術会議第二部会員、水産学分科会委員長）

竹内 俊郎（日本学術会議連携会員、東京海洋大学海洋科学系教授）

(提案13)

公開シンポジウム「高齢者が安心して暮らせるコミュニティとは」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 健康・生活科学委員会高齢者の健康分科会
2. 後 援：第72回日本公衆衛生学会総会
3. 日 時：平成25年10月23日（水）18時00分～20時00分
4. 場 所：三重県医師会館
5. 分科会の開催：予定なし

6. 開催趣旨：

高齢社会となり、高齢者が自律して、それぞれの地域で生き生きと健康的な生活をするようになることが必要となっている。その方法として、高齢者が相互に地域社会で協力して生活を支える、高齢者が多世代と交流しながら、共に生活を支え等の様々方法があり、試行されているところである。その方法については、地域の特性を踏まえて、多種多様な高齢者の生活形態を維持するために、高齢者自身の生活とその生活を受けとる地域社会の取組に協働事項が多いことも必要条件の一つとなる。そして、その協働事項を展開するには、保健医療福祉活動において生活支援に関わる者が、どう地域の人々に働きかけたらよいかを検討することが必要である。

本シンポジウムでは、保健関係者、福祉関係者、看護介護関係者、医療関係者等からそれぞれの取組を紹介し、意見交換を行いたい。

7. 次 第：

趣旨説明 小西美智子*（日本学術会議連携会員、高齢者の健康分科会委員長、
岐阜県立看護大学学長）

話題提供

福祉分野から

芳賀 博*（日本学術会議連携会員、高齢者の健康分科会幹事、桜美
林大学大学院老年学研究科教授）

リハビリテーション分野から

住居 広士*（日本学術会議連携会員、高齢者の健康分科会幹事、県
立広島大学大学院教授）

地域保健の立場から

尾崎伊都子（名古屋市立大学看護学部講師）

8. 関係部の承認の有無：第二部承認

(*印の講演者は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「デジタル・メディア時代の政治と選挙—日本における民主主義の現在」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 社会学委員会 メディア・文化研究分科会
2. 日 時：平成25年11月1日（金）14：00～17：00
3. 場 所：日本学術会議 5-C（1，2）会議室
4. 分科会等：開催予定

5. 開催趣旨：

2013年7月に行われた参議院議員選挙では、同年4月に改正された公職選挙法によって、初めてインターネットを使った選挙運動が認められた。しかし、結果は、戦後日本を長きに渡って支配してきた自民党の圧勝であり、保守回帰の傾向が一層強まった。投票率も、戦後3番目に低い52.61%に留まった。

いま私たちは、この結果を振り返って、選挙制度へのデジタル・プラットフォームの導入は、政治参加の拡大に直接的に貢献したり、政治的有効感を強化したりするものではないと結論づけるべきだろうか。

あるいは、結果とは別に、今回の選挙では、デジタル・メディアによって、政治コミュニケーションの質、およびダイナミズムに根本的な変化の萌芽が見出せたと言えるだろうか。そして、その変化は、今後の日本社会にどのような影響をもたらすだろうか。

シンポジウムでは、7月の参議院議員選挙で実際に何が起きていたのかについて、緑の党の推薦を受けて立候補し、インターネットを駆使して17万票以上を集めた三宅洋平氏に問題提起をお願いする。それを受けて、政治・世論研究、日本の戦後保守政治研究、メディア・社会運動研究等の立場から各研究者にコメントをもらう。その後、フロアからの質問も交えながら、デジタル・メディアが台頭する時代の日本の選挙、代議制民主主義、そして市民社会の行方について活発なディスカッションを行いたい。

6. 次 第

開会挨拶（14:00～14:05）

上野千鶴子*（日本学術会議第一部会員、立命館大学大学院先端総合学術研究科教授）

趣旨説明（14:05～14:15）

林 香里*（日本学術会議特任連携会員、東京大学大学院情報学環教授）

問題提起 (14:15～15:00)

三宅 洋平 (ミュージシャン、日本アーティスト有識者会議 (NAU) 代表)

討論者 (15:00～16:00)

Chris Winkler (ドイツ日本研究所専任研究員)

逢坂 巖 (立教大学講師)

遠藤 薫* (日本学術会議連携会員、学習院大学法学部教授)

全体討論 (16:00～16:50)

モデレーター

伊藤 守* (日本学術会議連携会員、早稲田大学教育・総合科学学術院教授)

閉会挨拶 (16:50～17:00)

田嶋 淳子* (日本学術会議連携会員、法政大学社会学部教授)

全体司会、コーディネーター

林 香里* (日本学術会議特任連携会員、東京大学大学院情報学環教授)

7. 関係部の承認の有無：第一部承認

(*印の講演者等は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「グローバル化時代における民主的統治とは」の開催について

1 主 催 日本学術会議 社会学委員会 社会理論分科会

2 日 時 平成25年11月9日(土) 13時00分～17時00分

3 場 所 日本学術会議講堂

4 分科会 開催予定

5 開催趣旨

グローバル化と情報化が進展した今日、国民国家の政治システムとして成立した代議制民主主義はさまざまな問題に直面している。それとともに、新しい形態の民主主義の可能性も生まれてきている。こうした現代社会の状況を多角的な視点から検討しながら、グローバル化時代における民主統治の在り方を模索する。

6 次第

13:00 -13:15

趣旨説明

開会挨拶：今田 高俊*(日本学術会議第一部会員、東京工業大学大学院社会理工学研究科教授)

司 会：吉原 直樹*(日本学術会議連携会員、大妻女子大学社会情報学部教授)
遠藤 薫*(日本学術会議連携会員、学習院大学法学部教授)

13:15-15:15

第1部:報告

「機能分化の変容と統治の拡散」

正村 俊之*(日本学術会議連携会員、東北大学大学院文学研究科教授)

「世界システムの変化と民主主義」

田中 明彦(日本学術会議連携会員、独立行政法人国際協力機構理事長)

「リスケーリングの視点から統治の再編を考える」

町村 敬志*(日本学術会議連携会員、一橋大学大学院社会学研究科教授)

「オルタナティブな民主主義の追求：グローバル社会運動における物事の決め方」

野宮大志郎*(日本学術会議連携会員、上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授)

15:15-15:45

休憩

15:45-17:00

第2部：討論

討論者

友枝 敏雄*(日本学術会議第一部会員、大阪大学大学院人間科学研究科教授)

橋本 努*(日本学術会議連携会員、北海道大学大学院経済学研究科教授)

7 関係部の承認の有無：第一部承認

(*印の講演者等は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「新しい植物保護技術の展望」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 農学委員会 植物保護科学分科会
2. 共 催：植物保護科学連合
3. 日 時：平成25年11月16日（土）13時00分～17時00分
5. 場 所：東京大学農学部1号館8番教室
6. 分科会の開催：開催予定

7. 開催趣旨：

地球規模での環境・食糧問題の解決を図るため、有害生物である雑草、害虫、植物病原微生物の農薬による排除や、植物成長を促進的に制御する植物保護技術が活用されてきた。また、生物学及び化学的な技術の融合により薬剤耐性を付与した遺伝子組換え作物が開発されてきた。今後、効果的な植物保護技術を開発するためには、生物学的ストレス要因となる菌類、細菌、害虫、雑草などの生物の科学や植物ゲノム科学の推進、さらに、化合物創製基盤の推進など基盤的研究の充実が求められている。

植物保護科学分科会は、植物保護を学術活動の基盤とする日本応用動物昆虫学会、日本植物病理学会、日本農薬学会、日本雑草学会、植物化学調節学会で構成される植物保護科学連合と連携し、これまでも、喫緊の課題を取り上げてシンポジウムを開催し、研究活動の深化を図ってきた。本年、学術大型研究計画として「化学とバイオテクノロジーの統合による植物保護・作物成長促進技術の開発」を提案していることから、関連分野における植物保護科学の研究の現状について紹介し今後の方向性を論議する。

8. 次 第：

- 13：00 開会挨拶「シンポジウム開催にあたって」
白石 友紀*（日本学術会議連携会員、植物保護科学分科会委員長、岡山大学大学院自然科学研究科教授）
- 13：10 総合科学としての農業を支える低分子・遺伝子統合技術
浅見 忠男（東京大学大学院農学生命科学研究科教授）
- 13：45 トマトかいよう病の疫学的解析による伝染源の解明とその根拠に基づいた防除
川口 章（岡山県農林総合センター農業研究所病虫研究室研究員）
- 14：20 炭疽病の分泌戦略を標的とする作物保護技術の基盤開発
白須 賢（(独)理化学研究所環境資源科学研究センター植物免疫研究グループ長）

14：55－15：05 （ 休憩 ）

15：05 天敵利用による新たな害虫制御技術の開発について

後藤 千枝*（日本学術会議連携会員、(独)農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究センター病害虫研究領域上席研究員）

15：40 雑草管理の将来展望と遺伝子組換え作物

與語 靖洋（(独)農業環境技術研究所研究コーディネータ）

16：15 植物保護科学連合の活動と今後の研究の方向性の検討について

松本 宏*（日本学術会議連携会員、植物保護科学連合運営委員長、筑波大学生命環境系教授）

16：30 総合討論

（司会）藤崎 憲治*（日本学術会議連携会員、植物保護科学分科会副委員長、京都大学名誉教授）

9. 関係部の承認の有無：第二部承認

（*印の講演者は、主催分科会委員）

公開シンポジウム「東日本大震災に係る食料の安全・安心を担保する生産・流通システム」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 農学委員会・食料科学委員会合同 農業情報システム分科会
2. 後 援：農業食料工学会、農業施設学会、日本農業気象学会、農業情報学会、生態工学会、日本生物環境工学会、農業農村工学会、日本農作業学会、農村計画学会（依頼中）
3. 日 時：平成 25 年 11 月 18 日（月）13 時 00 分～17 時 40 分
4. 場 所：日本学術会議講堂
5. 分科会の開催：開催予定

6. 開催趣旨：

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故による放射能汚染は、農業生産活動および生産物の流通に、事故発生 2 年半を経過してもなお長期的かつ多大な影響を及ぼしている。食料の安全な生産と供給が農業者、消費者を問わず国民の重大な関心事であることから、農業情報システム学の視点から、喫緊の課題である放射能汚染を念頭に置きながら、食料の生産・供給に関する安全性とそれを支えるシステムについて問題点を整理し、今後の課題を共有するための議論を行う。

7. 次 第：

13:00～13:10 開会挨拶

野口伸*（日本学術会議第二部会員、北海道大学大学院農学研究院教授）

13:10～13:50 「農地の除染技術と精密復興農業のスキーム」

洪澤栄*（日本学術会議連携会員、東京農工大学大学院農学研究院教授）

13:50～14:30 「低汚染土壌の放射性核種濃度と農作物への移行」

大下誠一*（日本学術会議連携会員、東京大学大学院農学生命科学研究科教授）

14:30～15:10 「食品の安全性確保に向けた農業生産工程管理(GAP)／IT の活用」

齊賀大昌（農林水産省 生産局 農産部技術普及課 課長補佐）

15:10～15:25 休憩

15:25～16:05 「東日本大震災に学ぶフードセーフティチェーンの必要性」
松田友義（千葉大学大学院園芸研究科教授）

16:05～16:45 「大規模災害時の食料供給の課題と復興支援」
藤井滋生（イオン株式会社 商品最高責任者付き、生鮮デリカリーダー）

16:45～17:00 休憩

17:00～17:30 総合討論
（司会）大下誠一*（日本学術会議連携会員、東京大学大学院農学生命科学研究科教授）
（コメンテーター）各講演者

17:30～17:40 閉会挨拶
大政謙次*（日本学術会議第二部会員、東京大学大学院農学生命科学研究科教授）

17:40 閉会

8. 関係部の承認の有無：第二部承認

（*印の講演者は、主催分科会委員）

(提案18)

公開シンポジウム「科学者が語る エネルギーの光と影」の開催について

1. 主催：日本学術会議 総合工学委員会 エネルギーと科学技術に関する分科会
2. 共催：社団法人日本機械学会、社団法人化学工学学会、社団法人日本エネルギー学会、一般財団法人コージェネレーション、エネルギー高度利用センター(予定)
3. 日時：平成25年11月19日(火) 13:30~17:10
4. 場所：日本学術会議講堂
5. 分科会の開催：開催予定

6. 開催趣旨：

福島原子力発電所の過酷事故等から既に2年以上が経過した。我国のエネルギー需給構造をどのようにすべきか。国民的議論が進む中、安定供給性、環境性、経済性、安定性など、多面的な視点から、いろいろなエネルギー源に対する光と影を科学者が平易に述べ、これらの科学的知見を基に国民が我国のこれからのエネルギーシステムの在り方について考える機会を与えることを目的としたい。

7. 次第：

13:30 趣旨説明

柏木 孝夫* (日本学術会議連携会員、東京工業大学ソリューション研究機構教授)

13:40 エネルギー選択—経済、リスクと国民の矜持

北澤 宏一* (日本学術会議連携会員、東京都市大学学長)

[国際共通課題と国別事情の中で、国家百年の計と直近のルートを考える]

14:40 3. 期待される再生可能エネルギーの今後の展望

大和田野 芳郎* (日本学術会議連携会員、独立行政法人産業技術総合研究所環境・エネルギー分野副研究統括)

[大量導入に向けた課題と国内外の政策、市場、技術開発の動向を紹介し、将来を展望する]

休憩 (10分)

15:50 非在来型化石燃料の将来性

松岡 俊文* (日本学術会議連携会員、京都大学工学研究科教授)

[化石燃料の類型化と非在来型による在来型の置換過程の将来
展望]

16:50 統括・閉会

山地 憲治* (日本学術会議第三部会員、公益財団法人地球環
境産業技術研究機構(RITE)理事・所長)

17:10 終了

9. 関係部の承認の有無：第三部承認

(*印の講演者は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「未来を担う低炭素コミュニティの構築」の開催について

1. 主催：日本学術会議 土木工学・建築学委員会 低炭素建築・都市マネジメント分科会
2. 後援：一般社団法人日本建築学会、公益社団法人空気調和・衛生工学会
3. 日時：平成25年11月28日（木）13：30～17：30
4. 場所：日本学術会議講堂
5. 分科会の開催：土木工学・建築学委員会低炭素建築・都市マネジメント分科会
6. 開催趣旨：
低炭素コミュニティの実現に必要な課題や、その解決の道しるべが明らかになっていない課題を抽出し、その解決法に関して議論する。
7. 次第：
司会 加藤信介*（日本学術会議連携会員、東京大学生産技術研究所教授）
 - (1) 趣旨説明
吉野 博*（日本学術会議会員、東北大学名誉教授・秋田県立大学客員教授）
 - (2) 低炭素建築・都市の関連の法制化の動き
浅見泰司*（日本学術会議連携会員、東京大学空間情報科学研究センター長・教授）
 - (3) 都市スケールでの低炭素化：スマートシュリンクと低炭素化
林 良嗣*（日本学術会議連携会員、名古屋大学・交通都市国際研究センター長）
 - (4) 都市コミュニティの再生可能エネルギー導入と課題
柏木孝夫*（日本学術会議連携会員、東京工業大学ソリューション研究機構教授）
 - (5) 地方都市における市街地再編問題
羽藤英二*（日本学術会議連携会員、東京大学大学院工学研究科都市工学専攻准教授）
 - (6) 市街地再編成を実現する上での法制化の課題
福井秀夫*（日本学術会議連携会員、政策研究大学院大学教授）
 - (7) 低炭素社会における見えない価値の見える化
伊香賀俊治*（日本学術会議連携会員、慶應義塾大学理工学部教授）

(8)各パネリストによる総合討論

ファシリテーター

吉野 博*（日本学術会議会員、東北大学名誉教授・秋田県立大学客員教授）

(9)まとめ

村上周三*（日本学術会議連携会員、独立行政法人建築研究所理事長）

8. 関係部の承認の有無：第三部承認

(*印の講演者は、主催分科会委員)

公開シンポジウム「これからの暮らしに家政学が果たすべき役割—家庭科
教員養成の観点から—」の開催について

1. 主 催：日本学術会議健康・生活科学委員会家政学分科会
2. 後 援：日本医歯薬アカデミー（予定）
3. 日 時：平成25年12月24日（火）13時30分～17時00分
4. 場 所：日本学術会議講堂
5. 分科会の開催：開催予定

6. 開催趣旨：

成熟社会にあるわが国においては、国民の個々人がどのような暮らしを営んでいくかが、社会の構造や経済、延いては日本社会の発展や国民の幸せに大きな関わりを持つと考えられる。人の暮らしを研究対象とする家政学が果たすべき役割が、今、新たに問われている。家政学を生活の実践の場で活用し、暮らしに必要な知識と技とを次世代に伝える分野として家庭科教育がある。家政学の充実・発展や家庭科教育のあり方が、暮らしを守り支える大きな力となるはずである。

家政学分野の大学・短大が家政学の教育を担い、家庭科教員養成の主力となっている。

本年5月には日本学術会議から報告「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準—家政学分野」が表出されている。このことから、家政学分科会としては、家政学及び家庭科教育の更なる発展・充実のためには、その第一歩として現在の家庭科教育のあり方を概観し、今後の在り方を検討していく必要があると考えた。

そこで、今回、家庭科の役割を振り返り、家庭科教育の現状や現場の担当者（教員）の現状を明らかにした上で、今後の改善点について課題を明らかにすることを目的として、本シンポジウムを開催する。

7. 次 第：

進行役 工藤由貴子*（日本学術会議連携会員、家政学分科会委員、横浜国立大学教育人間科学部准教授）

13：30 開会挨拶・趣旨説明（シンポジウム開催にあたって）

山本 正幸（日本学術会議第二部部長、かずさDNA研究所所長）

13：40 趣旨説明（シンポジウム開催にあたって）

片山 倫子*（日本学術会議連携会員、家政学分科会委員長、東京家政大学名誉教授）

14：00～14：30 招待講演（講演者調整中）

「今こそ暮らしが大切（仮題）」

14：30～16：00 講演

「家庭科教育の果たしてきた役割と現状（仮題）」

河野 公子（全国家庭科教育協会会長）

「家庭科教育の効果（事例）」

石島恵美子（千葉県立鎌ヶ谷高等学校教諭）

「家庭科担当教員の現状分析—アンケート調査の結果から—（仮題）」

上野 耕史（国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官）

16：00～16：15 （ 休憩 ）

16：15～16：55 ディスカッション

「家庭科教育の課題」

（司会） 澁川 祥子*（日本学術会議連携会員、家政学分科会副委員長、横浜国立大学名誉教授）

16：55 閉会挨拶

沖田富美子*（日本学術会議連携会員、家政学分科会幹事、日本女子大学名誉教授）

8. 関係部の承認の有無：第二部承認

（*印の講演者は、主催分科会委員）

サイエンスアゴラ2013の開催について

1. 主催：日本学術会議、独立行政法人科学技術振興機構
2. 共催：独立行政法人産業技術総合研究所、地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター、国際研究交流大学村、東京臨海副都心グループ
3. 後援：内閣府、文部科学省、農林水産省、独立行政法人国立科学博物館、独立行政法人日本学術振興会、独立行政法人理化学研究所、独立行政法人宇宙航空研究開発機構、独立行政法人海洋研究開発機構、大学共同利用機関法人自然科学研究機構国立天文台、公益財団法人日本科学技術振興財団・科学技術館、ブリティッシュ・カウンシル、東京都教育委員会、埼玉県教育委員会、神奈川県教育委員会、千葉県教育委員会、全国中学校理科教育研究会、全国科学博物館協議会、全国科学館連携協議会、公益社団法人日本技術士会、日本科学技術ジャーナリスト会議、一般社団法人日本サイエンスコミュニケーション協会、科学技術社会論学会、パナソニックセンター東京
4. 日時：平成25年11月9日（土）～11月10日（日）
5. 場所：日本科学未来館、産業技術総合研究所臨海副都心センター、東京都立産業技術研究センター、東京国際交流館、フジテレビ湾岸スタジオ、シンボルプロムナード公園
6. 分科会の開催：開催予定（科学と社会委員会科学力増進分科会、地球惑星科学委員会社会貢献分科会、若手アカデミー委員会）
7. 開催趣旨：

科学技術に関する国民の理解を深め、科学技術と社会の在り方に関する議論を喚起するため、シンポジウムや講演会、ワークショップなど、多様なセッションを同時開催することにより、科学技術政策への国民参画の促進を視野に、広く科学技術に関わるコミュニケーション活動すべてを包含する「科学コミュニケーション・オールジャパン」を体現する場を提供することを目的とする。
8. 開催内容：

次の5つのセッションを開催する。詳細は別紙参照。

 - ・「若者に発信する日本学術会議：＜知の航海＞シリーズから」
 - ・「シンポジウム 高校で学ぶべき「サイエンス」とは？」
 - ・「科学・技術でわかること、わからないこと Part III —インフラクライシスと大規模災害—」
 - ・「『地球に生きる素養』って何？ 対話で考える、私と地球の付き合い方～」
 - ・「若手研究者たちと考える、君達の、そして日本の未来」

【若者に発信する日本学術会議：〈知の航海〉シリーズから】

開催日時：2013年11月9日（土）13時00分～14時30分

開催場所：日本科学未来館 7階 会議室2

定 員：84名（入退場自由）

<概 要>：

日本学術会議は中学生・高校生の科学への関心を高めることをねらいとして、〈知の航海〉シリーズを企画してきた。このセッションでは、執筆者3氏が登壇して、〈知の航海〉シリーズに込めたメッセージを披歴していただく。さらに来場者との交流も含めて、科学者から若者に向けた発信の今日的意義について理解を深めるとともに、シリーズの刊行による波及効果や意外な副産物といった要素を含めて、多角的に意見交換を行う。

<プログラム>

13:00～13:05 開会挨拶（5分）

家 泰弘（日本学術会議副会長、東京大学物性研究所教授）

13:05～13:20 話題提供1（15分）

「さとやま：生物多様性と生態系模様」

鷺谷 いづみ（日本学術会議第二部会員、東京大学大学院農学生命科学研究科教授）

13:20～13:35 話題提供2（15分）

「ロボット創造学入門」

広瀬 茂男（日本学術会議連携会員、
東京工業大学機械宇宙システム専攻教授・センター長）

13:35～13:50 話題提供3（15分）

「理系女子的生き方のススメ」

美馬 のゆり（公立はこだて未来大学情報アーキテクチャ学科教授）

13:50～14:30 パネル討論（40分）

パネリスト：鷺谷 いづみ（日本学術会議第二部会員、東京大学大学院農学生命科学研究科教授）

広瀬 茂男（日本学術会議連携会員、東京工業大学機械宇宙システム専攻教授）

美馬 のゆり（公立はこだて未来大学情報アーキテクチャ学科教授）

コーディネーター：生源寺 眞一（日本学術会議第二部会員、名古屋大学大学院生命農学研究科教授）

（科学と社会委員会 科学力増進分科会）

【シンポジウム 高校で学ぶべき「サイエンス」とは？】

開催日時：2013年11月9日(土) 15時30分～17時00分

開催場所：日本科学未来館 7階 みらいCANホール

定員：300名(入退場自由)

<概要>：

国民の科学技術リテラシーの育成、理工系人材の確保や浮きこぼれる科学好き生徒のフォローアップはこのままでよいのだろうか。本シンポジウムでは、日本の中等教育が抱える課題の解決に向けて、日本学術会議をはじめ関係機関・団体が横断的に議論を始めるためのキックオフイベントである。次期学習指導要領改訂に向けて、普通科高校生全員必修の高校理科共通科目の可能性とその中身について多角的に議論したい。

文系の高校生にとっても魅力的かつエッセンシャルズな「サイエンス」とは？科学技術立国として必要な科学力とは？今回は特に、東日本大震災と福島原発事故を再考し、防災教育としての地学分野および放射線やエネルギーに関する物理分野をも含む国民全員にとって必要不可欠なサイエンス・リテラシーとは何か、さらに、それをいつどのように修得させていくのかを検討する予定である。

<プログラム>

15:30～15:35 開会挨拶(5分)

柴田 徳思(日本学術会議連携会員、公益社団法人日本アイソトープ協会常務理事)

15:35～16:00 講演(25分)

田代 直幸(文部科学省初等中等教区局教育課程課教科調査官)

小川 正賢(東京理科大科学教育研究科教授)

16:00～17:00 パネルディスカッション(60分)

パネリスト：田代 直幸(文部科学省初等中等教区局教育課程課教科調査官)

小川 正賢(東京理科大科学教育研究科教授)

宮嶋 敏(埼玉県立深谷第一高等学校教諭)

下山 佳那子(筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程2年)

渡辺 政隆(日本学術会議連携会員、筑波大学教授)

モデレーター：縣 秀彦(自然科学研究機構国立天文台准教授、日本サイエンスコミュニケーション協会副会長)

(科学と社会委員会 科学力増進分科会)

【科学・技術でわかること、わからないこと Part III —インフラクライシスと大規模災害—】

開催日時：2013年11月9日（土）15時30分～17時00分

開催場所：日本科学未来館 7階 会議室2

定員：84名（入退場自由）

<概要>：

東日本大震災は、わが国のインフラの脆弱性を露呈したが、首都圏の直下型大地震や東海・東南海・南海大地震の発生が予想されている中で、様々なインフラの老朽化による事故が目立ち始めている。最近では、2012年12月に発生した笹子トンネル天井の崩落事故で、9名の人命が失われた。高度成長期に集中整備されてきたわが国のインフラは、今後20年以内に建築後50年以上を経過するものが50%を超えようとしている。加えて、建築当時の耐震基準は現在と比べてかなり低く見積もられていたことから、大規模災害に直面した場合には、危機的状態を迎えることが危惧されている。現在のインフラを適切に維持・管理し、長寿命化を図ることが必須であるが、維持管理のための費用や技術、また技術を担う人材の不足が、それを難しくしているとの意見もある。大規模災害に備え、インフラクライシスを乗り越えるために、現状ではどのような方策がとられているのか、またどのような対策がとられるべきかを様々な視点から議論する。

<プログラム>

15:30～15:32 開会挨拶（2分）

渡辺 政隆（日本学術会議連携会員、筑波大学教授）

15:32～15:52 話題提供1（20分）

「南海トラフ巨大地震の現状と展望 — 観測、リアルタイムモニタリングならびにシミュレーションの総合研究 —」

金田 義行（海洋研究開発機構地震津波・防災研究プロジェクトリーダー）

15:52～16:12 話題提供2（20分）

「安全を基本から考える—安全思想の提案—」

向殿 政男（日本学術会議連携会員、明治大学名誉教授）

16:12～16:32 話題提供3（20分）

メディア関係者（交渉中）

16:32～16:57 パネル討論（25分）

パネリスト：柴田 徳思（日本学術会議連携会員、日本アイソトープ協会常務理事）

金田 義行（海洋研究開発機構地震津波・防災研究プロジェクトリーダー）

向殿 政男（日本学術会議連携会員、明治大学名誉教授）

メディア関係者（交渉中）

コーディネーター兼パネリスト：

室伏 きみ子（日本学術会議会員、お茶の水女子大学名誉教授/寄附研究部門教授）

16:57～17:00 閉会挨拶（3分）

柴田 徳思（日本学術会議連携会員、日本アイソトープ協会常務理事）

（科学と社会委員会 科学力増進分科会）

【「地球に生きる素養」って何？ 対話で考える、私と地球の付き合い方～】

開催日時：2013年11月9日（土）15時30分～17時00分

開催場所：産業技術総合研究所臨海副都心センター別館11階 多目的室

定員：40名（入退場自由）

<概要>：

地震、津波、豪雨、竜巻—地球の活動は、時に様々な災害をもたらします。それら自然の影響の中で、上手に自分達の身を守って暮らすための知を、ここでは「地球に生きる素養」と名づけました。本企画は、どんな素養を身につけるべきか、「答え」を示すものではありません。住む土地や家族構成や仕事など、一人一人異なる生活に合った「私にとっての地球に生きる素養」とは何か、皆で考えるものです。様々な視点から地球を見つめる研究者達が話題提供を行った後、参加者と共にテーブルに座り、「地球に生きる素養」について話し合います。

<プログラム>

15:30～15:35 開会挨拶（5分）

北里 洋（日本学術会議第三部会員、独立行政法人海洋研究開発機構海洋・極限環境生物圏領域領域長）

15:35～16:05 話題提供

パネリスト：3名の有識者（交渉中）

コメント：熊木 洋太（日本学術会議連携会員、専修大学文学部教授）

西 弘嗣（日本学術会議連携会員、東北大学総合学術博物館教授）

ほか、社会貢献分科会委員が議論に参加

16:05～17:00 グループディスカッション

コメント：熊木 洋太（日本学術会議連携会員、専修大学文学部教授）

西 弘嗣（日本学術会議連携会員、東北大学総合学術博物館教授）

ほか、社会貢献分科会委員がMCとして参加

（地球惑星科学委員会社会貢献分科会）

【若手研究者たちと考える、君達の、そして日本の未来】

開催日時：2013年11月10日（日）13時00分～14時30分

開催場所：東京国際交流館4階 会議室

定員：60名（入退場自由）

<概要>：

日本学術会議若手アカデミーでは、次世代を担う科学・技術関係人材を育成するため、青少年の科学・技術への興味・関心を喚起し、科学・技術に親しみ学ぶことが出来る場を提供すること、また国民と科学・技術に関わる者が直接対話する双方向のコミュニケーションを実現し、国民の声を国の研究開発に反映すること等を目的とした活動を行っている。

サイエンスアゴラ2013において、様々な最先端科学・技術分野の若手科学者と高校生・大学生らが、生命科学や先端医療、情報化社会や防災など、現代社会に欠かせないキーワード（例えば2050年に必要と考えられる科学・技術）をテーマにブレインストーミングを行う。参加者に科学者を身近に感じてもらうとともに、議論の面白さ、アイデアが研究に形づくられる過程を体験してもらうことを狙いとしている。

<プログラム>

13:30～13:05 開会挨拶（5分）

駒井 章治（日本学術会議特任連携会員、奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科准教授）

13:05～14:05 グループ討論（60分）

若手アカデミー委員+部外からの研究者（参加者を呼びかけ）を3人組にして4グループ程度作る。各グループに参加した高校生などを15名前後入れ、あらかじめ決めておいたテーマ（生命科学や先端医療など）についてディスカッションを行う。テーマの大枠は、「君たちの、そして日本の未来」とし、若手科学者の側から、ごく簡単にテーマについての説明と、簡単な自己紹介・研究内容の紹介のあと、参加者とのディスカッションを実施する。

若手科学者側の参加者：

狩野 光伸（日本学術会議特任連携会員、岡山大学医歯薬学総合研究科教授）

田中 由浩（日本学術会議特任連携会員、名古屋工業大学大学院工学研究科助教）

他、若手アカデミー委員会委員、国内若手研究者ネットワーク参加団体からの協力者

14:05～14:25 討論結果報告（20分）

各グループで取りまとめた内容を全体に報告する。

14:25～14:30 閉会挨拶（5分）

狩野 光伸（日本学術会議特任連携会員、岡山大学医歯薬学総合研究科教授）

（若手アカデミー委員会）